

# 円筒下層式土器

泊(1)遺跡出土 縄文時代前期(約5,600年前)

## 円筒土器文化圏の始まりの土器:細かな縄目の美しさ

縄を押し当てて  
三角などの文  
様をつける

■円筒土器文化圏:約5900年前の十和田カルデラ噴火後に、これまで草創期から作られてきた尖底土器群が、途絶え、魚などの煮炊きに使われた痕のある筒状の円筒土器群が出現する。人の入れ替わりがあったのだろうか。円筒土器文化圏の始まりだ。円筒下層式唐上層式に発展し、円筒下層e式から集落は、大型化していき榎林式土器の時期の最大を迎える。

赤矢印は、新しいもの  
水色の矢印は、以前から  
引き継がれているもの

◆横向きに転がした縄目

◆絡条体:串に巻き付けた縄目



津軽地域に多い  
斜縄文



南部地域に多い  
多軸絡条体



縄文時代の津軽と南部!  
串に巻き付けて転がす  
縄目の美しさ

◆泊(1)遺跡には単軸絡条体が多い!



土器の壁面を  
まっすぐ立ち  
上げてバケツの  
様な円筒形!

円筒下層式土器は、縄文1万年の中で一番多彩な縄目の文様をもつ。縄を串に巻き付け、転がすと縄目が縦に並ぶ単軸絡条体がつく。さらに串の本数を増やすと縄目が互い違いに並ぶ多軸絡条体がつく。縄目の並びが地域によって異なり、“津軽と南部”の様な地域性が見られる。粘土紐など華やかな装飾をつけず、多様な縄目を使うことが円筒土器の人々のこだわりだったのだろうか。

# 円筒上層 a 式土器

上尾駁(1)遺跡出土 縄文時代中期(約5,500年前)

中期の始まりの土器:円筒上層土器は顔が大事!



円筒上層 a2 式土器の特徴は、口縁部に付く太い粘土紐、粘土紐と粘土紐の間につく縄の押圧文である。器の形は、底から胴部にかけてまっすぐ立ち上がり、口縁部はラッパのように広がる。また、口縁部は大ぶりに波立つ。円筒上層式土器の装飾は口縁部に集中し、胴部は縄文のみがつけられるという構図になっている。

# 円筒上層b式土器

富ノ沢(1)遺跡 縄文時代中期前半(約5,300年前)

まだ集落が形成されていない頃の一番古い土器

C字に縄を  
押し当てる  
円筒上層 a 式から

平行に縄を  
押し当てる  
円筒下層式から

円筒下層式土器  
の胴部では、縄  
を縦に転がし、円  
筒上層 a 式から  
は縄を横方向に  
転がす。この土器  
には、羽状縄文が  
つく  
円筒上層 a 式から

円筒上層c式土器  
に多用される串  
の刺突文が少数  
見られる

口縁部の粘土  
ひもが a 式よ  
り複雑になる

「北海道・北東北の  
縄文遺跡群」のロゴ  
マークに採用され  
た代表的な円筒土  
器の形をしている

赤矢印は、新しいもの  
水色の矢印は、以前から  
引き継がれているもの

富ノ沢遺跡で見つかる一番古い円筒土器。口縁部に粘土紐の文様がより複雑になり、すき間をうめる C 字の縄の押圧文が特徴的である。口縁部の波長部をよくみると、円筒上層 c 式土器に多い串の刺突文が少数見られる。集落が始まる頃、円筒上層 b 式土器を作る人と円筒上層 c 式土器を作る人が共存していたのかもしれない。

# 円筒上層c式土器

富ノ沢(2)遺跡出土 縄文時代中期(約5,100年前)

集落が形成され始めた頃の土器:若者を中心とした流行の土器

波立たない口縁部が出現



だんだんと粘土紐が細く、より複雑に貼り付けて装飾  
円筒上層 a 式から

横方向に縄を転がす  
円筒上層 a 式から

縄目を押し当てた押圧文が見られなくなった

串の先を押し当てた刺突文に変化

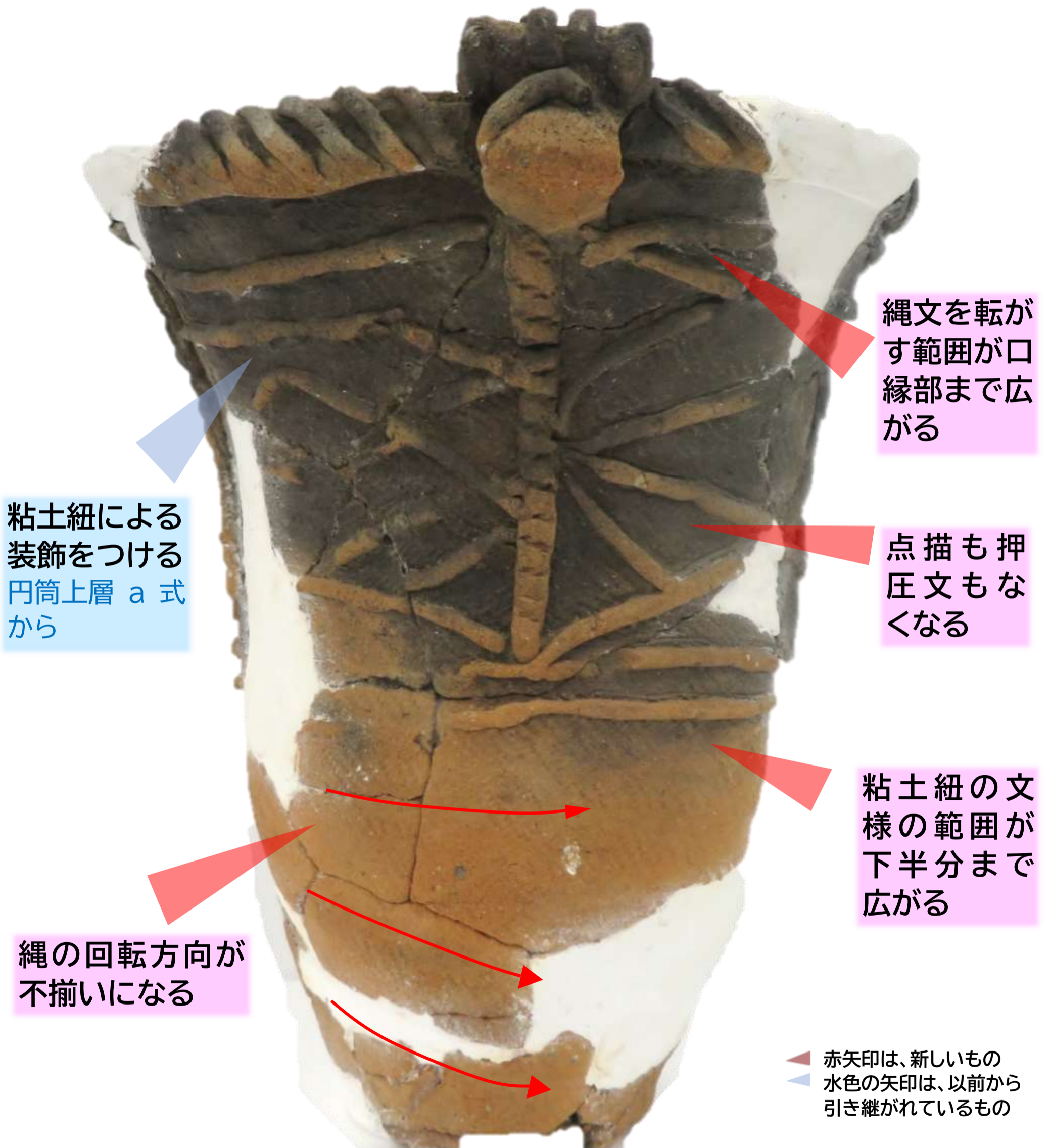
赤矢印は、新しいもの  
水色の矢印は、以前から引き継がれているもの

富ノ沢遺跡の円筒上層 c 式土器には、伝統的な縄の押圧文が見られない。この土器は集落が始まる頃のもので、住居跡が 9 棟の小規模集落だった。故郷を離れ、新たなデザインの土器をもつ若者を中心とした集団がこの台地にやってきて、モノや人が集まる新たな集落が始まったことをうかがうことができる。

# 円筒上層d式土器

富ノ沢(2)遺跡 縄文時代中期中頃(4,900年前)

土器文様は単純になるが、集落は大きくなり複雑になる



円筒上層 d 式土器になると、文様の装飾が粘土紐のみになる。この頃の住居跡から東北南部に多い大木式土器が見つかり、それに影響を受けたような円筒土器が出現する。墓域や高床式住居が作られ、竪穴住居には土器を埋めた炉や灰を敷いた炉など特異な炉が見られるようになる。土器の文様は単純化し、計画的な集落作りが行われる。

# 円筒上層e式土器

富ノ沢(2)遺跡 縄文時代中期(4,700年前)

大木式土器文化を取り入れた富ノ沢集落



文様が付く範囲が、下半分まで広がる  
円筒上層 d 式から

縄文を転がす範囲が口縁部まで広がる  
円筒上層 d 式から

縄の回転方向が不揃いになる  
円筒上層 d 式から

粘土紐がなくなり、沈線文により胸骨文をつける

形が円筒形ではなくなる  
円筒上層 d 式から

赤矢印は、新しいもの  
水色の矢印は、以前から引き継がれているもの

円筒上層 e 式土器の特徴は、串などで描かれる沈線文である。沈線文は東北南部の大木 8a 式土器から影響を受けた文様だと考えられている。富ノ沢遺跡の住居跡から、大木式土器文化に特徴的な石囲炉や無茎石鏟が見られるようになる。集落の生活や狩猟にまで、大木式土器文化の影響が及んでいる様子を見ることができる。

# 円筒上層e式土器

三内丸山遺跡 縄文時代中期(4,700年前)

## 同じ円筒土器文化圏の土器



※2つの土器は青森市教育委員会所蔵

日本最大級の三内丸山遺跡も同じ円筒土器をつくる集落であった。沈線文や器面全体への縄文、口縁部の突起への顔面突起など共通する点が多い。文様や器の形が完全に一致はしないが、なんとも言えない個性がある。それぞれ違う人が土器を作るが、当時の煮炊きや水がめに使う器へのイメージは共通していたからである。

# 榎林式土器

富ノ沢(2)遺跡 縄文時代中期(4,500年前)

大木式系土器に変化し、大規模集落になった

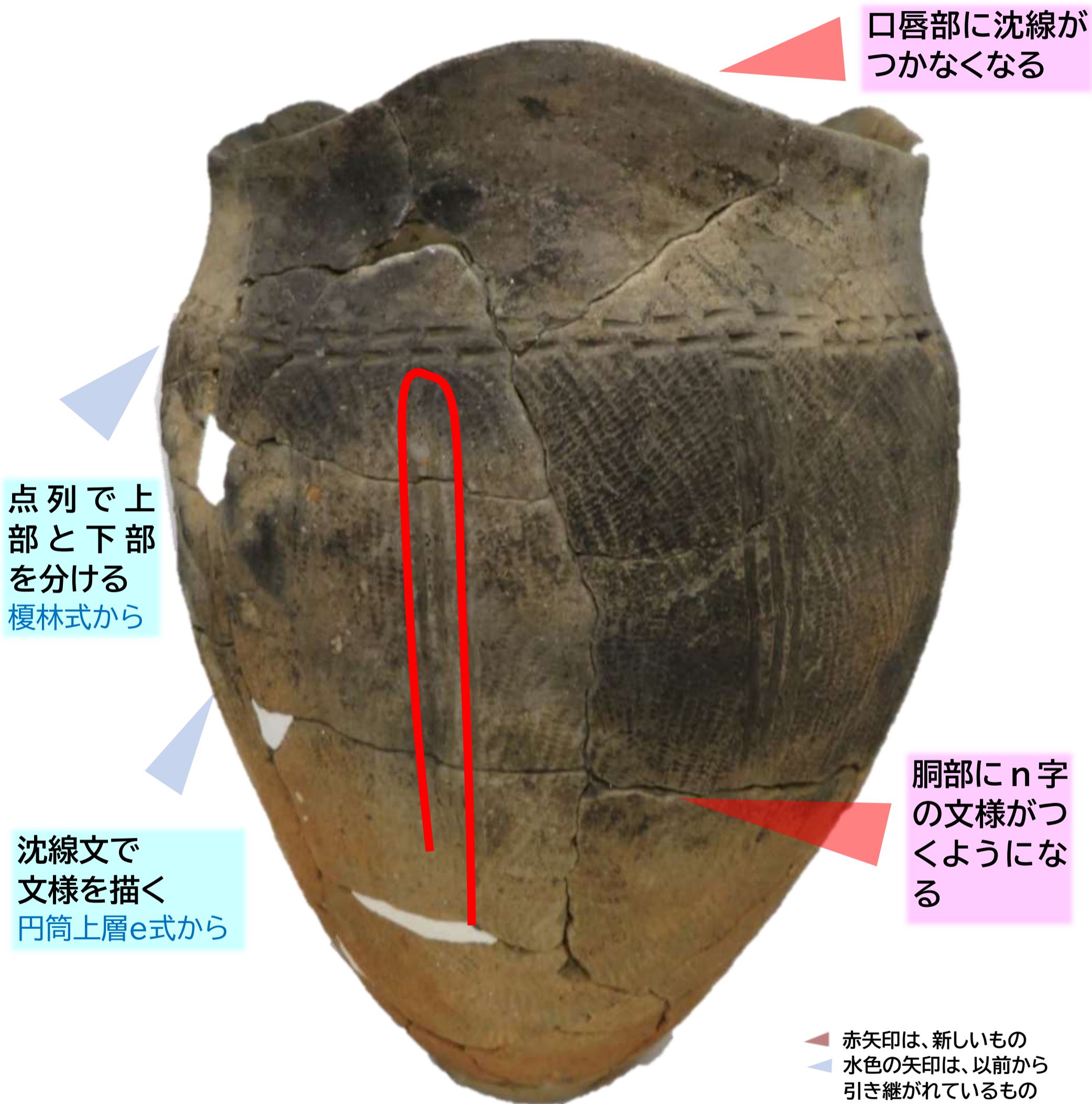


円筒土器のように上部につく文様が、榎林式土器になると土器全体に渦巻文がつくようになる。これは大木 8b 式に極めて近い土器である。この頃、竪穴住居跡数が最大となる。住居跡や墓域の位置関係が今までの集落とも変わり、土器や石器など道具だけでなく、ムラの様子までも変化した。

# 最花式土器

富ノ沢(2)遺跡 縄文時代中期(約4,300年前)

急激に集落の分散化が進み、小規模化する



口唇部に沈線が  
つかなくなる

点列で上  
部と下部  
を分ける  
榎林式から

沈線文で  
文様を描く  
円筒上層e式から

胴部にn字  
の文様がつ  
くようになる

赤矢印は、新しいもの  
水色の矢印は、以前から  
引き継がれているもの

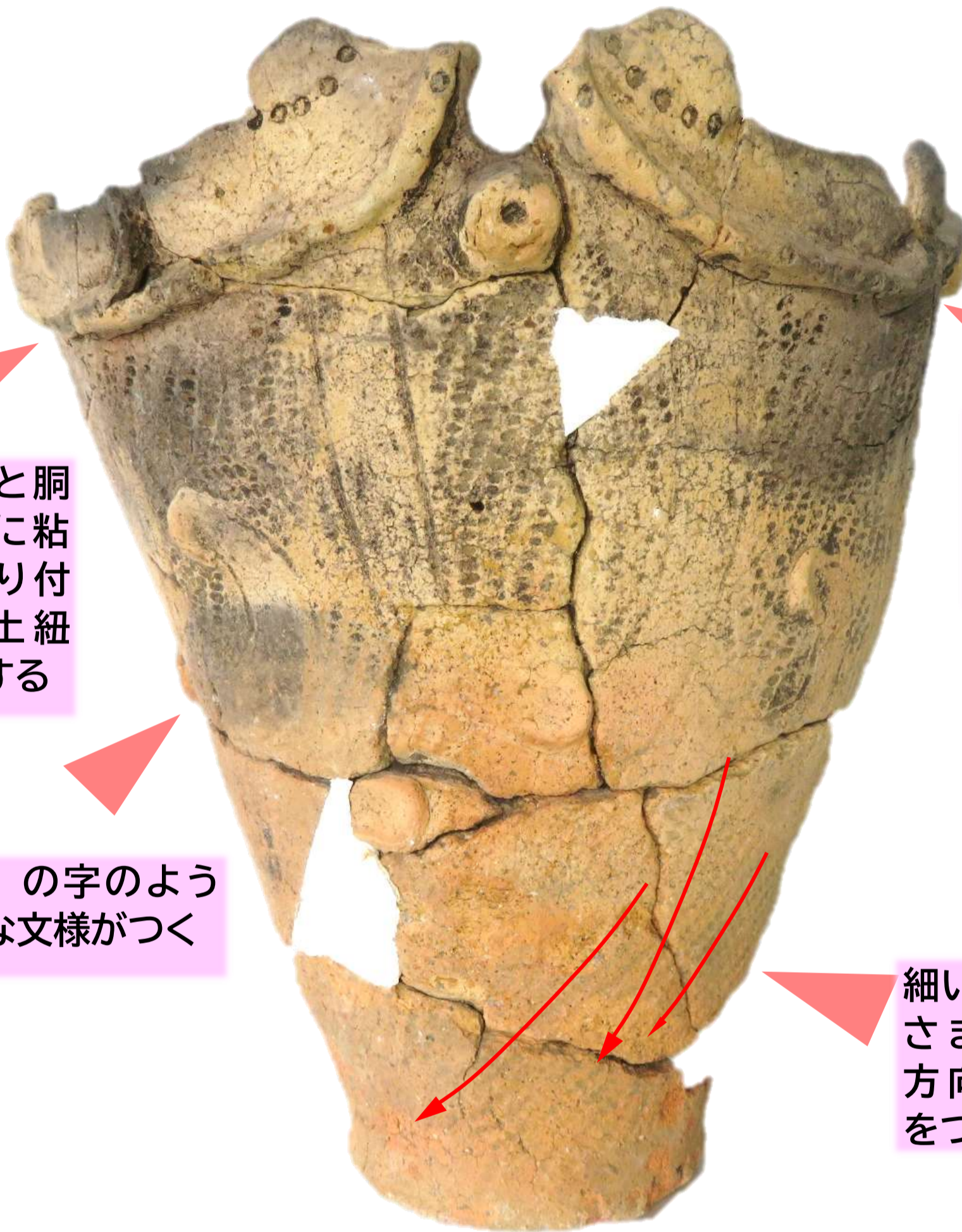
最花式土器になると、細長いn字の文様がつく。これは、大木9式土器につく逆U字文に類似している。土器の上部には文様がつかず、縄目は縦に並ぶようになっている。土器の文様と同様に、この円筒土器の頃から集落の企画性が崩れ住居数が減り、住居跡が分散して見られるようになる。大集落が衰退していることがよくわかる。

# 大木10式併行土器

富ノ沢(2)遺跡C地区 縄文時代中期(約4,100年前)

東北南部の大木式土器の影響を強く受けた土器が出現

aa



口縁部と胴部の間に粘土を張り付け、粘土紐を刺突する

口縁部にボタン状の装飾がつけられる

Jの字のような文様がつく

細い縄文で、さまざまな方向に縄文をつける

赤矢印は、新しいもの  
水色の矢印は、以前から引き継がれているもの

この土器は約4,100年前のもので、上部には粘土紐と円形の刺突文と突起がつき胴部に細い縄目がつく。東北南部の大木式土器文化圏の影響を強く受けたこのような土器は、円筒土器文化圏の大集落には見られなかった。この頃、住居跡がC地区の小高い丘の上に見られるようになり、ムラの中心的位置が変わったように見える。石で囲った炉が急増し、円筒土器文化圏とは全く異なる人々の生活様式に変化した。